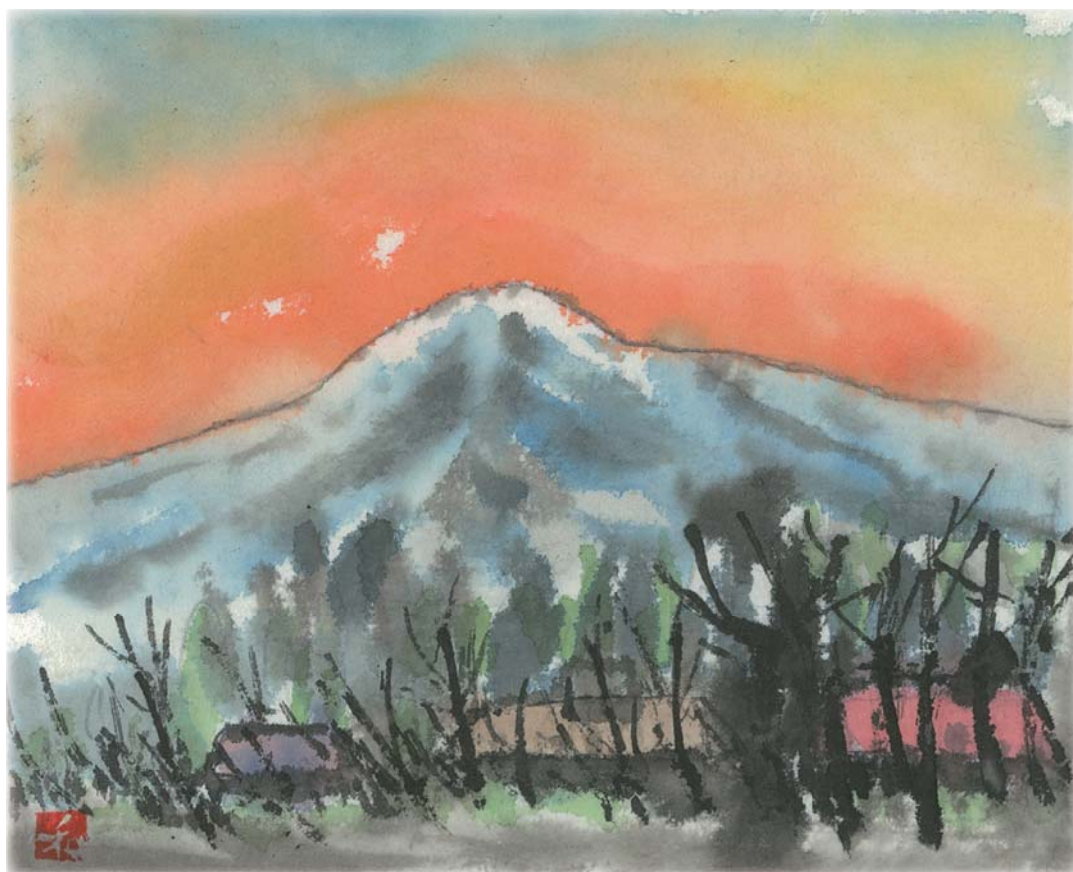


人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

地域づくりinほくりく

2017 NEW YEAR



初春の磐梯山
会津磐梯山は宝の山と言われています。
北陸の宝を探して磨きましょう。

絵 土田 和男

- | | | | |
|---|---|---|----|
| ❖ 新年のご挨拶
大林 厚次(北陸地域づくり協会 理事長) | 2 | ❖ シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」
トゲソで五泉自慢
NPO法人五泉トゲソの会(新潟県五泉市) | 10 |
| ❖ 年頭のご挨拶
中神 陽一(北陸地方整備局長) | 3 | ❖ 北陸再発見
会話はずむ高岡コロッケ (富山県高岡市) | 12 |
| ❖ 随想
上野 迪音(高田世界館 支配人)
日本最古の映画館の再生と、街の未来 | 4 | ❖ 特集「地域とともに」Ⅰ
耶麻農高生の「チャレンジ出店」で山都そばを発信
会津山都そば協会(福島県喜多方市) | 14 |
| ❖ 特別企画
梯川分水路通水記念式
-計画決定から20年を経て、通水へ-
北陸地方整備局 金沢河川国道事務所 | 6 | ❖ 特集「地域とともに」Ⅱ
地域づくりセミナーを開催しました | 16 |
| | | ❖ 会員だより | 19 |
| | | ❖ 伝言板 | 20 |

新年のご挨拶

(一社)北陸地域づくり協会 理事長

おおばやし こうじ
大林 厚次



新年明けましておめでとうございます。

会員の皆様におかれましては、健やかに新年を迎えられたこととお喜び申し上げます。

昨年も各地で多くの自然災害が発生し甚大な被害をもたらしました。4月14日21時26分、熊本地方を震源とするマグニチュード6.5の地震(前震)が発生し、益城町が震度7を観測しました。その28時間後の4月16日1時25分には、同じく熊本地方を震源とするマグニチュード7.3の地震(本震)が発生し、震度7を観測。マグニチュード7.3は阪神・淡路大震災と同規模の大地震です。当初、14日に発生した地震が本震で、その後に発生するものは余震であり地震の規模で上回ることは想定されていなかったようです。しかし、16日未明のマグニチュード7.3の地震が発生したことを受けて、気象庁は同日、後者(16日)の地震を本震とし、前者を前震との見解を発表しました。このようなことは希であり、前震、本震で震度7が2回発生したことにより家屋の倒壊が相次ぎ、地震による直接の死者も50人に達しました。また、名城の一つである熊本城が大きな被害を受け、早速修復に取り組まれているが、天守閣の復元は3年後の2019年、全体の修復には約20年間の期間を要すると言われていました。

8月には大型台風10号の影響で、30～31日にかけて岩手、北海道を中心に記録的な大雨となり死者22人、行方不明者5人に上り、農作物にも大きな被害があり、その後の野菜の高騰が未だに続き家計を苦しめています。

改めて災害王国日本、全国いたるところが災害の可能性があり、日頃からの災害に対する心構えと備えが重要であることと、防災・減災対策を強力に取り組まなければならないことを痛感させられた年でありました。

海外ではイギリスのEU離脱、韓国大統領の弾劾、アメリカ大統領選挙、ロシア外交等、目を見張るような出来事が多くありました。アメリカ大統領選挙は大方の予想に反しドナルド・トランプが勝利。アメリカの不動産王として名

を馳せ莫大な資産を持つ大富豪で、当初は泡沫候補の一人としてみられ、暴言ともとれるような過激な発言によって多くの批判を受けたが見事当選を果たしました。トランプショックによって国際秩序が大きく変わる可能性があり不安視されています。一つにTPP離脱は、アベノミクスの成長戦略の命綱であり練り直しが迫られる事態になるとも言われています。

一方、我が国は人口減少時代を迎え生産年齢人口も減少し、経済成長を続けるためには生産年齢人口の減少を上回る生産性向上を図らなければならないとされています。

平成27年国勢調査の結果によれば、65歳以上が4人に1人を超え(26.6%)、75歳以上は12.8%、15歳未満の12.6%を上回り少子高齢化が進展しています。このそれぞれを世界水準と比べると65歳以上は世界水準を上回り、15歳未満は世界で最も低い水準となっています。

このことから、各産業にとって将来の担い手確保のための職場環境の改善とともに、その生産能力を保つため生産性の向上を図ることが喫緊の課題となっています。

国土交通省においても、昨年を「生産性革命元年」と位置づけ、生産性向上の取り組みがスタートしたところであります。

当協会の発注者支援業務等からの撤退は、H28年12月の長野県内業務の事業譲渡を最後に全て終了することが出来ました。撤退するにあたり多くの問題を抱えておりましたが、会員の皆様のご理解は勿論のこと、職員の全面的な協力により円満に無事終えることが出来ました。改めて御礼を申し上げる所でございます。現在は殆どの業務を譲渡したことから残り業務はほんの一握りとなり、新たな分野の業務発掘と信頼性の高い組織構築に取り組む所存であります。引き続き会員の皆様のご指導・ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。

終わりに、今年は皆様にとって素晴らしい一年になりますようご祈念申し上げ挨拶といたします。

年頭のご挨拶

国土交通省 北陸地方整備局長

なかがみ
中神
よういち
陽一



あけましておめでとうございます。協会のみなさまといっしょに仕事をさせていただくのはほぼ四半世紀振りです。わたくしの世代はバブルの空気を肌で知っている最後の世代かと思えます（そのせいか某通信キャリアの1980のなんとか、というCMは好きです）が、バブルを経て、公共投資がピークを迎える平成9年以降、現在までの失われた20年を常態として経験した世代にとっては公共事業バッシング、予算カット、地方分権、仕分け、ガソリン国会と常に逆風にさらされてきたと言える、と感じています。

しかしながらここに来てL字回復とは言え、予算もマイナスにはならない環境になって若干光明が見えたかな？という気がいたします。昨日より今日、今日より明日がすこしでも良いというのはたいへん重要なことかと思えます。

また担い手確保のため、人件費をアップさせてきましたし、週休二日制の導入の推進や女性参画に向けた環境改善などの取り組みを進めているところです。これらの政策は、実はバブルの頃に議論検討していた事柄とほとんど同じで（デジャビュ（既視感）を覚えます）、時代背景も変わりつつあると実感します。ひたすらコストカット＝善という時代から、みんな一斉にコストカットに走れば合成の誤謬でデフレ化する、ということが漸く国民的なコンセンサスとなってきた、とホッとしている状況です。

そんな中で北陸の状況を拝見しますとちょうどプロジェクトの端境期であったところ、昨年の利賀ダムの本体着工再スタート、大河津分水路の大規模改修スタート、日東道村上～温海間

の着工など新しい事業が立ち上がってきている状況です。

またここ10年ほど取り組んできているテックフォースの活動も昨年は熊本地震、岩手の台風10号の被災地に隊員を派遣し被災地からは感謝と評価を受けているところです。このような地道な取り組みの積み上げで防災危機管理に整備局はなくてはならない存在という評価が得られつつあると認識しています。

また昨年から本格的な取り組みがスタートしたi-Constructionについては先端技術の現場への活用によって省人化、作業の安全化、効率化を狙いとしておりますが、整備局が率先して研修会・見学会等を開催するなど地域のリーダーシップを取りながら普及啓発活動を進めており、構造物等の点検技術やロボット、無人化施工の開発導入など、率先して課題解決の音頭を取る組織への脱皮を図って参りたいと思えます。

失われた20年で、ともすれば後ろ向きな対応に追われがちだったところから漸く前向きな取り組みに舵を切ることができる、そんな時代の“トバロ”にいる、という気持ちで明るい新年をみなさまといっしょに迎えることを喜びつつ年頭のご挨拶とさせていただきます。

日本最古の映画館の再生と、街の未来

うえの みちなり
上野 迪音

NPO 法人 街なか映画館再生委員会
高田世界館支配人



1987年上越市生まれ。横浜国立大学で映画論を専攻。大学院時代に日本最古級の映画館である高田世界館で映画の自主上映会を開催したことが縁となり、2014年から同館を運営するNPOに勤務。古い町並みが残る上越市高田地区に立地する同館を、まちづくりの中心的な拠点として盛り上げるべく、映画上映だけに留まらない多様な活動を展開している。その様子はNHK Eテレ「人生デザインU-29」、日本テレビ「NEWS ZERO」にも取り上げられる。

■ 人を集める仕掛けを探す

新潟県上越市にある「高田世界館」は明治44年(1911年)築の、今年で106歳になる映画館で、現存する映画館としては日本最古とも言われています。元々は芝居小屋として建てられた当館は、2階席や特徴的な天井の装飾など、当時の趣がそのまま残った状態で今も営業を続けています。2011年には国の登録有形文化財にも指定され、最近ではその珍しさからテレビや雑誌など様々なメディアに取り上げられることが多くなりました。



天井装飾、円柱などは106年前のまま手つかずで残る。2階席からも鑑賞可能。

私は2014年に地元である上越にUターンをし、そこから高田世界館で勤務しています。映画館を舞台に、映画のことからまちづくりのことまで幅広く活動中です。当初は1人体制で映画館の業務をこなしていたのですが、現在は市民ボランティアを含め複数のスタッフとともに映画館を盛り上げています。ちなみにスタッフはそのほとんどが20～30歳代で構成されていて、日本最古の映画館でありつつも若々しい顔触れが揃っているということで、良い意味でア

ンバランスな面白さがあるのではないかと思います。

さて、建物の物珍しさだけでなく地域活性の拠点として注目を集めるようになった当館の昨今ですが、現在のような常設の上映館として「営業」するようになるまでの道のりは決して簡単なものではありませんでした。直前の30年間は成人映画館として存在しており、それゆえに地域コミュニティからは遠ざけられていましたし、老朽化した設備や2007年の中越沖地震でダメージを受けた建物の修繕をしなければなりません。また、それまでの経営者だった前オーナーから現在の運営母体であるNPOに経営が移ったものの(2009年)、映画館経営のノウハウもなく、常駐する職員もいませんでした。当時は月に数回上映やイベントがあるだけで、普段はがらんとしていました。つまり建物自体の修繕は進んでいたものの、人を日常的に集めるような仕掛け(コンテンツ)がなかったのです。そういった状況のなか、当時まだ大学院を卒業したばかりの私が常駐職員として勤務することになったのでした。

■ 地域の活力をつなぐ

大学で映画評論を学んでいた私は、専門を活かせる映画館で働けるならと東京での就職活動を切り上げて地元に戻る決意をしたわけですが、それ以前にもまちづくりに興味があり、高田世界館だけでなく上越にある他のまちづくり団体に在学中から顔を出すなどして情報交換を進めていました。思えばその期間に、どういう風に

地域と関わるかの具体的なイメージトレーニングができていて、それが現在の活動の推進力につながっているのではないのでしょうか。なんにせよ、地域にそういった機運や土壌があったことは幸運だったと言えるでしょうし、自分がいまやっていることは、彼らが地域の文化を大事にしようとしてきた活動を（形は違えど）引き継ぐ形で行っているのではないかと思います。実際、それまで個々の点であった地域の活力が、最近では線で繋がりがつつあるという状況が生まれてきているのです。まだまだ先は長いですが、上越、それも高田世界館のある高田地区は今後10年間で何かしらの地域活性のモデルを打ち立てられるのではないかと思います。

■ 「+α」の可能性

話を映画館の活動に戻したいと思います。

高田世界館では一般的な劇映画の上映に加えて、ドキュメンタリー映画の上映本数が多くなっています。そのねらいとしては、例えばグルメ、教育、福祉、音楽、などなど、それぞれ特定のテーマを持った作品を上映することで、映画ファンの枠を飛び越えて広く社会の構成員に呼びかけることができるということにあります。テレビの出現、レンタルビデオの発達（もっと言えばネット配信の登場）、そして趣味嗜好の多様化ということもあり、いまや「良い映画を映画館で観よう」という呼びかけでは人を集められない時代になってきました。そういった状況にあって、ただ単に良作を上映するような「待ち」の姿勢ではなく、それぞれの題材に対して問題意識を持った方々を巻き込んでの企画を立てることが経営上においても重要になってきます。

こうした方針は単に経営を支えるということだけではなく、映画を通じて能動的に社会とつながれるという利点も含んでいます。

例えば食肉を題材にしたドキュメンタリーでは地元の商店街の肉屋とコラボして、上映後にバーベキュー大会を開いたりもしました。他にも市民ゲストを招いてのトークショーなど、題材に合わせて地域に根ざしたイベントを組み込んでいます。

映画の「形」が多様になりつつあるなか、都市部の映画館ならいざ知らず地方の映画館においてはその存在意義が問われつつあります。



バーベキュー大会 (2014. 8. 30)
映画に合わせた地元の食肉店とのコラボイベント。
グルメは老若男女問わず誘引力がある。

大事なのは映画上映に「+α」を付け加えること。そのαの部分に映画館を飛び越えて他者とつながれる可能性があり、映画館が単なる娯楽施設を超えて社会に存在し、地域を活気づけるエンジンとなりうるというのが私の考えです。映画館も変わらなければならないのです。

高田世界館は運のいいことに、街の中心部に立地し、地域コミュニティと接した形でそれを進めることができます。また帰省シーズンには多くの地元出身者が訪れ、「新しい」地域の顔として認知されるという状況も生まれています。郊外型のショッピングモールや大型スーパーが乱立し、地域のアイデンティティが希薄化するなか、この古い映画館が果たす役割は決して小さくないと思います。

映画館の未来、そして街の未来。どちらも見通しが明るいものではありませんが、やれることはまだまだあるように思います。



イベント上映の様子 (2016. 10. 22)
インド映画を見ながら騒ぎ散らす恒例のイベント。
映画館でしか味わえない非日常性を演出。

梯川は、昭和46年に国による河川改修に着手し、川幅の拡幅工事(引堤)を進めてきました。梯川改修の一部である梯川分水路は、平成8年の計画決定から20年を経て、平成28年11月20日(日)、通水という大きな節目を迎えました。

この通水を記念するとともに、治水事業の役割や効果を地域の皆様にお伝えし、防災意識の高揚を図ることを目的として、通水式を挙行了しましたので、ここに報告いたします(図-1)。



図-1 梯川分水路の位置図

1. 流域の概要

梯川は、その源を石川県小松市の鈴ヶ岳すずがに発し、山間部を北流して、郷谷川等ごうたにを合わせた後、流れを西に転じて平野部を流下します。その後、手取川と梯川によって形成された扇状地を西に蛇行して、鍋谷川や八丁川の支川を合わせつつ、小松市街地を貫流し、河口付近で木場潟より流れ出る前川を合わせて、日本海へ注ぐ、流路延長42km、流域面積271km²の一級河川です。

梯川は、流域面積が小さく、洪水の流出時間が早いことから、避難や水防活動の時間確保が困難であるという洪水特性を有しています。流域は、山間部と海岸砂丘に囲まれた低平地を抱え、ひとたび氾濫が発生すると、浸水域は広範囲かつ浸水深も大きく、外水・内水氾濫が複合的に発生して、浸水継続時間も長期化しやすい地形となっています(写真-1)。

一方、氾濫域の下流部には、小松市や能美市の市街地が広がり、繊維・機械等の産業が集積しています。沿川には、小松空港や北陸自動車道、国道8号、JR北陸本線等、関東や関西と北陸を結ぶ基幹交通のネットワークが形成されてきました。また、縄文・弥生時代の遺跡、歌舞伎の勧進帳で知られる安宅あたかの関、加賀藩三代藩主前田利常により創建された小松天満宮や小松城等の史跡・文化財、九谷焼等の伝統産業があり、これらは流域の社会・経済・文化の基盤をなしています。



写真-1 梯川流域の地形特性

2. 梯川下流部における堤防整備の経緯

梯川では、昭和34年に小松市内で本川堤防の決壊による氾濫が生じました。その後、昭和43年に支川の八丁川、鍋谷川の堤防決壊による洪水被害が発生したことから、昭和46年に国は梯川を一級河川に指定し、「梯川工事实施基本計画」を決定して河川改修に着手しました。

しかし、家屋連担部である市街地において、小松天満宮や一般家屋等の移転を伴う川幅の拡幅計画であり、上流にダムを建設すれば抜本改修は成り立つと認識していた住民が多かったことから、当時は、拡幅計画に対する地域の理解が得られませんでした。

このため、国は昭和54年には人家が少ないJR梯川橋梁から八丁川合流点までの区間において拡幅工事を完了させる一方、県は昭和53年に赤瀬ダムを完成させる等、低い治水安全度を

踏まえて着実に治水事業を進めてきました。

さらに、市街地における活発な住民説明会等による努力の結果、拡幅計画への理解が徐々に得られ、住民の多くが治水対策に期待を寄せる方向へ動きはじめたことから、川幅の拡幅工事を進めてきたところです。

その後、平成8年に小松天満宮を現位置に保存するために分水路方式として改修計画を変更しており、平成11年には梯川下流部（前川合流点から白江大橋）が都市計画決定され、道路整備や家屋移転（193戸）等のまちづくりと一体となった整備が促進されてきました。

梯川分水路の完成により、梯川下流部における一連の堤防整備は完了することになります（写真-2、写真-3）。

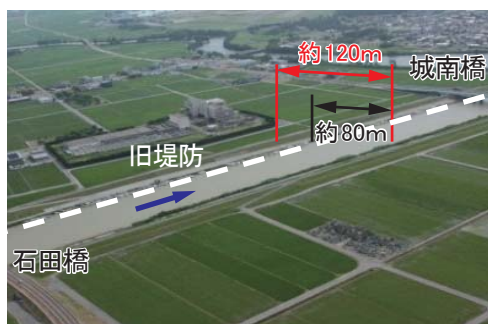


写真-2 城南橋～石田橋の堤防整備 (H10)



写真-3 小松新橋～白江大橋の堤防整備 (H24)

3. 梯川下流部における堤防整備の効果

梯川では、平成10年、16年、18年、25年と堤防高に迫る洪水が頻発しています。特に、平成25年7月の梅雨前線による出水では、埴田水位観測所において計画高水位まであと1cmに迫る観測史上最高水位を記録し、沿川の地域には避難指示や避難勧告が発令される等、危険な状況となりました。

この出水では、川幅の拡幅工事により水位低減が図られた結果、川から水があふれ出して堤防決壊を招く「越水破堤」を未然に防ぐことが

できたものと考えられます。小松新橋から白江大橋においては、川幅を80mから120mと1.5倍に広げたため、約70cm（推定）の水位低減効果を発揮しています（図-2）。

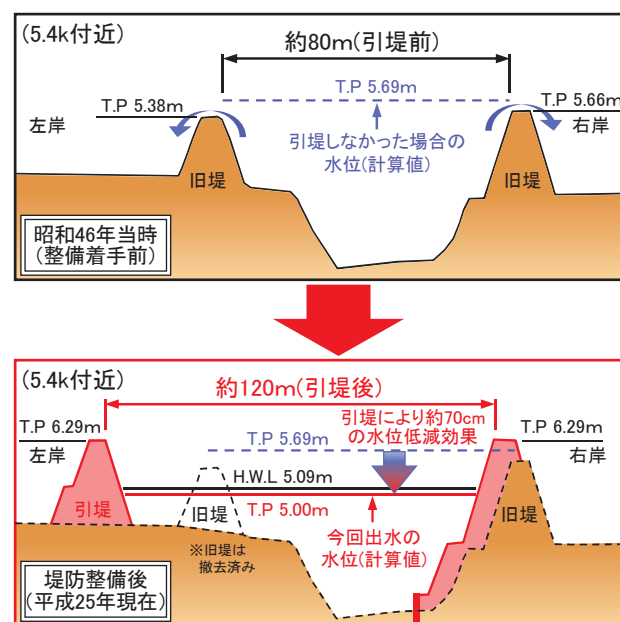


図-2 川幅の拡幅工事の効果 (H25 出水)

4. 梯川分水路改修の必要性

(1) 小松天満宮の由緒

小松天満宮は、前田利常が小松城に隠居後、祖先神として崇拝する菅原道真を祭る北野天満宮を模して、明暦3年（1657年）に創建されました。江戸時代初期の優れた建築様式を今に伝えるところから、昭和36年に国の重要文化財に指定されています（写真-4）。



写真-4 小松天満宮本殿

また、小松天満宮は、卯辰山、金沢城本丸、小松城によって、一本の線によって結ばれる位置にあり、「小松城の鬼門にあたる良の方向、すなわち東北にあたる梯川のほとりを選び、小松城の守りを堅固にすることを願ったもの」といわれています。

(2) 梯川分水路改修の必要性

梯川は、低い治水安全度と頻発する水害を踏まえて、早期の河川改修が課題でした。特に小松天満宮付近は、従来の川幅が約80mしかなく、洪水の流下能力が不足して危険な状態にあり、川幅を100m程度に広げて洪水を流れやすくする必要があります。

一方、小松天満宮は、小松市の成り立ちに関わる歴史的・文化的なシンボルであり、国指定の重要文化財であることから、現位置での保存が求められました。

このため、治水対策と文化財保護の両立の観点から、模型実験や平面2次元流況解析による検討や技術検討委員会による審議を踏まえて、川の流れを分派させて、小松天満宮境内を中の島とする分水路方式が採用されたものです（写真-5）。



写真-5 模型実験と技術検討委員会

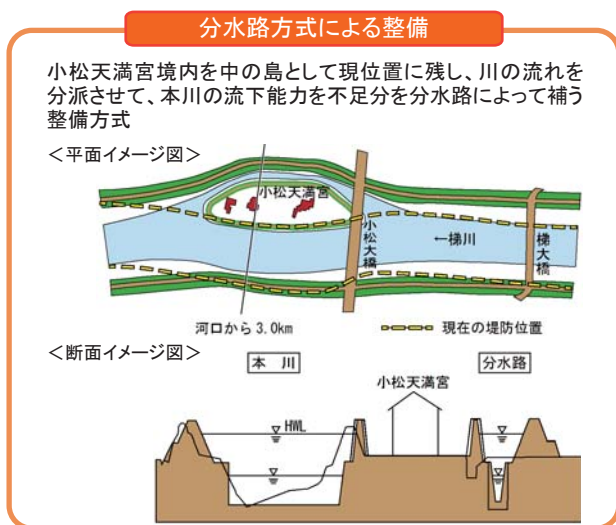


図-3 分水路方式のイメージ図

本川の堤防法線や分派形状については、一般家屋の移転を最小限とするほか、右岸の正光寺、左岸の葭島神社の移転を避ける等の社会的合理性や、分水路により確実に分派可能か、河床洗掘・堆積の影響は生じないか等の技術的合理性を踏まえて決定されました（図-3）。

今後は、平常時及び洪水時の適正分派と河床変動等を把握するため、モニタリング調査を実施していく予定です。

(3) 治水対策と一体的な歴史的町並みの復元

小松天満宮周辺では、小松市、国土交通省、石川県の各事業が一体的に進められてきました。市は旧北国街道筋における歴史的町並みの復元、国は梯川分水路の整備、県は小松大橋の架替を実施し、まちづくり、川づくり、道づくりを行っています（図-4、写真-6）。



図-4 治水対策と一体的なまちづくり



写真-6 分水路関連工事の実施状況

事業を進める上では、景観検討に関する市民アンケートを実施して地域の意見を反映するとともに、学識者からなる「小松天満宮整備計画評価委員会」の助言を踏まえて、文化的価値

の重要性を勘案して保存と利用への配慮に努めています。これにより、小松天満宮を取り囲む輪中堤は、南北方向に約 70 m、東西方向に約 220 m の大きさで、階段状にプレキャスト製品を積み上げた箱型擁壁工法を採用しました。分水路は、幅約 20 m、延長約 320 m で、低水護岸には植生機能付きの大型ブロックや魚巢ブロックを採用しています（図-4）。

5. 通水記念式典

平成 28 年 11 月 20 日（日）、石川県小松市天神町地先において、来賓・関係者を含む総勢約 60 名が参加し『梯川分水路通水記念式』が執り行われました。

式典は、はじめに和田慎司小松市長の式辞から始まり、泊宏国土交通省水管理・国土保全局治水課長の挨拶が行われた後、来賓を代表して、佐々木紀衆議院議員、石川県知事（代理）から祝辞をいただいています。

和田市長からは、「昨今は北海道から九州まで予期せぬ大水害が発生している。市民が安心できる生活や、企業が未来志向にたった事業展開ができる社会のために、水害への備えの重要性を次世代につなげていきたい」との式辞を述べられました。また、佐々木議員からは、「国の重要文化財である小松天満宮を移転させることなく、分水路方式で浮島として保存された。かつての小松城が浮城であったこと、水郷の町であったことを彷彿させる、この地域ならではの治水事業である」とのお言葉をいただきました（写真-7）。



写真-7 和田市長と佐々木議員の式辞・祝辞

続けて、富山英範金沢河川国道事務所長の工事説明の後に、くす玉開披が行われると、分水路に梯川の水が流れ込み、UAV（ドローン）のデモンストレーション撮影が行われています。関係者は、上空から撮影した分水路の様子

を映し出すモニターに見入り、地域住民も橋の上から通水の様子を見守っていただきました（写真-8、写真-9）。



写真-8 くす玉開披と通水の瞬間



写真-9 ドローンによる通水の映像

6. おわりに

梯川改修事業にご尽力、ご協力いただきました関係各位に感謝の意を表するとともに、引き続き流域の皆様のご理解をいただきながら、更なる防災・減災対策を強力に推進して参りたいと考えております。

また、本年度は、前川排水機場が稼働開始から 20 年、梯川分水路通水が計画決定から 20 年という節目の年になりました。現在、洪水時には分水路に水を流すことが可能な状態にまで整備が進んでおり、来年度にかけて、前後の河道掘削や護岸の仕上げを行い、最終的な完成を予定しています。関係機関が連携し、本年度から来年度にかけて、梯川改修事業を記念したイベントを行うことで、治水事業の役割や効果を地域の皆様にご理解いただくとともに、防災意識の高揚を図り、今後起こり得る災害に備えて参りたいと考えております。

出典・参考文献)

- 1) 梯川水系河川整備基本方針・河川整備計画
- 2) 金沢河川国道事務所 HP

シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

トゲソで五泉自慢

NPO 法人五泉トゲソの会（新潟県五泉市）

五泉トゲソの会は、1997年4月、「イバラトミヨ」（トゲソ）の保護活動などを目的に発足し、今年、活動20周年を迎える。毎年、春の観察会と秋の生息個体調査を行い、昨年「みどりの日」に、その功績が認められ「自然環境功労者環境大臣表彰」を受賞した。

発足当初から、会の中心となり活動を進めてきた中村^{なかむら よしのり}吉則理事長からお話を伺った。

トゲソから始まったまちづくり

中村理事長は、会がNPO法人登録するまで五泉市内で働いており、まちづくり、地域活性化の課題を解決するために何ができるか模索していた。「阿賀に生きる」の上映を機に、川、自然との共生をテーマに勉強会を始めることになった。時を同じくして、「イバラトミヨ 五泉で確認」という新聞記事を目にする。



新潟県の絶滅危惧類に指定されているトゲソと巣（五泉トゲソの会提供）

地元では背びれがトゲのような形をしていることから「トゲソ」と呼ばれ、「売れない、飼えない、食えない」と言われる魚だった。

調べていくとイバラトミヨは絶滅危惧種の希少淡水魚で、氷河期の遺存種ともいわれ、湧水のでるきれいな水、エサとなる水生生物が棲める水草がそろわないと生息できず、五泉市がイバラトミヨの日本の南限であることが分かってきた。五泉市は五の泉と書くように、きれいな湧き水が市内のあらゆる場所に湧いていたが、高度経済成長期に工場用水として大量の地下水を使用し、また生活排水を川に流してきた。さらに川をコンクリートで囲む河川改修など、河川環境の変化で水草が減り、生息地が激減していた。五泉を代表するトゲソを絶滅の危機から守り次代へつなげようと活動がスタートした。

「水とトゲソ」を学ぶ小学生

会では、毎年、五泉市内の小学校6校で3年生から5年生の総合的学習の支援をしている。

その中の一校、五泉市立南小学校は子どもたちに豊かな水環境に恵まれた五泉市に誇りを持ってもらおうと、校舎改築に合わせ長さ10メートルの小川（水路）が作られた。その小川を1999年11月から会と協力し、トゲソがすめるビオトープとして整備し、環境学習の場として活用するようになった。

「トゲソは1年魚。オスは『巣作り』と子育てを南小学校で17年間行い命をつないできたことになる」と感慨深そうに語る中村理事長。



中村理事長

トゲソキャップをかぶった中村理事長が訪れると「トゲちゃん」と呼ぶ声があちこちから聞こえる。6月から約半年、3年生は「オスは水草に巣をつくとメスにジグザグダンスで求愛する。メスは産卵すると巣を去りオスが子育てする」などトゲソの生態、生息環境などを楽しく学びながら水路の管理を行っている。しかし、3～5cmと小さく、ビオトープで観察するのは難しかった。



ビオトープ「南の泉」

新潟市水族館マリニピア日本海のアドバイスを受け、井戸にパイプにつなげた「かけ流し式観察水槽」を設置し、子どもたちがいつでも生態を観察できるようになった。

11月11日、トゲソの生息数を調べた後、10匹のトゲソを水槽に入れるお祝いの式が行われ、水槽は「キラキラしあわせ トゲソのおうち」と名付けられた。「巣づくりのようすがみられるようになるね」と子どもたちは早速、水槽に顔を近づけうれしそうに見つめていた。

ゲストティチャーとして出席した中村理事長はトゲソが子どもたちの宝物となれば嬉しい、と語った。



- 1 H28. 11. 11 の生息数調査では 83 匹を確認した。
- 2 捕れたトゲソからビオトープの状況を子どもたちに説明する樋口事務局長
- 3 キラキラしあわせ トゲソのおうち

トゲソの里づくり

昨年、事務局長に就任した樋口 ひぐち 正仁 まさひと さんは、イバラトミヨの近縁種であるイトヨの研究で博士号を持つ研究者でもある。会で講演をしたのをきっかけに会員となった。会員が高齢化していく中、活動をリードし、ホームページや Facebook などの情報発信を一手に引き受けている。「幸い、ボランティア活動に対して理解のある職場環境であったため、手弁当で活動を応援してこられた。若い人にもっと入ってきたいが、給与を支給できるほどの余裕がない」と活動を続けていく難しさを痛感している。

中村理事長は、「トゲソを守ると同じように地域の景観や文化を守っていかないといけない」と、会の事務所となっている国登録有形文化財・「坂田家」を活用した活動を進めている。



国登録有形文化財・「坂田家」

坂田家は庄屋・戸長を務めた家。江戸末期建築を昭和に大改修した建物。突出した入母屋造りの玄関が特徴。

トゲソの観察会にあわせた坂田家の一般公開、坂田家の居間での「五泉朝活」など、交流に力を入れている。また東京に住んでいる坂田家の当主が、旅行業に詳しいことから、春秋には都会の人がなくしてしまった実家(田舎)体験の小旅行などを行っている。地元の宝であるトゲソ、湧水、坂田家の3つの「地財」と人をつなげた湧水の里づくりを考えている。「活動を続けていくには、人材、資金などの問題もあるが、SNS、これまでの築いてきたネットワークを活かして、人と生物が共生する地域づくりを進め、子どもたちが自慢できるまちにしていきたい」と将来を見据えていた。

「子どもや若い人にトゲソの生態を知ってもらいたい」と始まった保護活動は、人と人、地方と都市部を結ぶ地域づくりへと発展し新たな道を歩み始めていた。



水路に「巣」をつくるために大事な水草「ミクリ」を足すなどトゲソの生息環境を見守っている。(五泉市土堀付近)



五泉市立南小学校3年生とポーズをとる中村理事長

取材協力：NPO法人五泉トゲソの会

五泉市土堀 295
電話：0250-22-0271
ホームページ

<http://www.geocities.jp/gosentogeso/>

会話はすむ高岡コロッケ

高岡市はコロッケでまちおこしを進めている。厳しい定義はなく、高岡市内のスーパー、肉屋などで販売されていれば「高岡コロッケ」と名乗られる。店先に「高岡コロッケ」の黄色いのぼりがあったら、どんなコロッケがあるのか覗いてみよう。

[上]男性に人気の
ブラックコロッケ
[下]女性に人気の
ホワイトコロッケ
(町屋 Cafe Asian)



[上]じゃがいもと挽肉の
コロッケ
[下]常連さんを名前で
出迎える光子さん
(丸長精肉店)

コロッケの消費量が日本有数

高岡市はコロッケの消費量が日本有数だというデータがある。それは共働き率が高いからだという。夕飯のおかず「あと一品何か」という時に、和食にも洋食にも合い、老若男女問わず人気のコロッケを買って帰るお母さんが多いそうだ。

そこで、高岡市の若手職員が、コロッケでまちおこしをしようとホームページで紹介し取り組みがスタートした。平成20年からは富山新聞社が事務局となり、高岡市、地元の企業で「高岡コロッケ実行委員会」を結成し活動している。

平成25年からは、茨城県龍ケ崎市、静岡県三島市、高岡市の「三コロ会」が持ち回りで、全国各地のご当地コロッケを大集合して、No.1を決定する「全国コロッケフェスティバル」を開催している。龍ケ崎市で行われた第1回フェスティバルで「高岡コロッケ」は見事優勝を果たした。

食べ歩きできるコロッケ

優勝した「ブラックコロッケ」、「ホワイトコロッケ」を販売している「道の駅 万葉の里高岡」の

中にある「町屋 Cafe Asian」を訪ね、山崎 秀太さん、香奈さんご夫妻からお話を伺った。

「現在、12種類のコロッケを販売しています。売上ベスト3は、優勝した2つのコロッケと大仏コロッケです」。



売上ベスト3、形も味もいろいろ
(右から)「ブラックコロッケ」、
「ホワイトコロッケ」、「大仏コロッケ」



お客様に「高岡コロッケ」の魅力を伝えたいという山崎香奈さん

「ブラックコロッケ」は、名前のとおりイカ墨が入り真っ黒。富山ブラックラーメンと同じ醤油味で黒胡椒がきいたスパシーな味わい。具材にはチャーシューとネギが入っている。ビールとよく合うので、男性に人気とのこと。

「ホワイトコロッケ」は、富山県民が大好きなとろろ昆布がたっぷり入り、ご飯が練りこまれている。もっちりとした食感で、女性に人気があるそうだ。給食にも提供され子供たちにも「おいしい」と評判がいい。

「大仏コロッケ」は、じゃがいもコロッケ。高岡大仏をイメージしてつくられたもので、直径 14 cm と大きさが特徴になっている。

「富山の食材を活かしてつくっていったら、黒、白のほかにゴボウの香りと味噌が隠し味のブラウン、高岡産ハウレンソウとユズ胡椒が隠し味のグリーン、五箇山のかぼちゃを使ったイエロー、地元のんにくとチーズ、ベーコンを使ったピザ風のオレンジと 6 色になり、シロエビコロッケも入れて「カラーコロッケ」として売り出しています。

道の駅にあるので、食べ歩きしやすいよう袋を用意し、形も一口で食べられるように工夫しています。県外から来られる方が圧倒的に多いですが、もっと地元の人にも立ち寄ってもらえるようになり、対話ができたらいいなと思っています」と香奈さんは言う。

ご主人の秀太さんは、「ひと月に 1 回は、高岡コロッケの宣伝で県外にでかける。その種類の多さにびっくりされるが、知名度はまだまだ。もっと他県の人に知ってもらえるよう、富山の食材を活かした商品を開発している。

昨年は「シロエビクリームコロッケ」を開発し、コロッケフェスティバルに出品した。売上高は 1 番だったのに、残念ながら人気投票は 3 番だった。



これまであった「シロエビコロッケ」をクリーム仕立てにした「シロエビクリームコロッケ」

高岡といえばコロッケの町と言われるように皆に愛されるコロッケをつくっていきたい」と意気込んでいた。

50 年間変わらない味

「高岡コロッケ」と言われるずっと前の昭和 42 年から、コロッケを販売している丸長精肉店まるちようは、家族 4 人でその味を守っている。創業者、嶋林 邦夫さんの奥様、光子さんは、「50 年間、店の上質な肉と北海道産男爵 M 寸でつくってきた。値段も消費税が 8% になるまでずっと 40 円（現在は 50 円）で販売していた」と話す。

朝、自宅の釜でじゃがいもを茹でるのは、邦夫さん。それを店に持ち込み、具材を練り込み、砂糖と塩で味付するのは息子の健一さん。そして揚げるのは主に健一さんのお嫁さんの好美さん、お客の相手をするのは光子さんと役割が決まっている。

1 日平均 400 個弱、販売している。運動会シーズンには、このほかに 1 日 400 個の予約が入ることもあるという。

肉といっしょにコロッケを買いにひっきりなしに客が訪れる。「いらっしゃい〇〇さん、今日は何にしましょう」に始まり、「病気をたってきたけど、もういいんけ」など、顔見知りのお客さんがほとんどだが、中には雑誌で見たと北海道や佐渡から来て、その後も機会があれば訪れるリピーターが何人もいるという。最近では、道路がよくなり、車で石川県、愛知県から買いに来る人が増えている。また、近くにある中学校の卒業生が丸長さんのコロッケの味がなつかしくなってやってくることもある。

コロッケは何ととっても揚げたてが一番おいしい。注文してから 5 分、その間の会話が、コロッケをよりおいしくする大切な時間のように感じられた。

取材協力：

丸長精肉店

高岡市あわら町 13-31
電話：0766-23-1070



創業以来の味を守り続ける嶋林 邦夫さん

町屋 Cafe Asian

高岡市蜂ヶ島 131-1「道の駅 万葉の里高岡」内
電話：080-9653-8787



特集「地域とともに」Ⅰ

第21回「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業

(一社)北陸地域づくり協会は、(社)北陸建設弘済会時代の平成7年から、公益事業として「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業制度を創設し、地域活性化に成果が期待できる事業を募集・採択し支援してきました。

今回は現在助成している事業の中から1課題を紹介します。

耶麻農高生の「チャレンジ出店」で山都そばを発信 / 会津山都そば協会(福島県喜多方市)

もてなしのそばで地域振興

山都町(平成18年1月喜多方市に合併)は、福島県の西北に位置し、飯豊連峰のふところ深くに抱かれた、文字どおり山の都である。標高が高く、寒暖の差が激しい風土はそばの生育に適し独自のそば文化が育まれてきた。

山都の良質なそばは、山間部によくある「米の代用」として食べるものではなく、結婚式、正月、誕生祝い、祭り、お盆など、ハレの日にごちそうとして食べる「もてなしのそば」が、各家庭で受け継がれている。客の来訪に合わせ、家で栽培したそばの実を挽き、つなぎを入れずそば粉だけを水でこねてそばを打つ、つなぎを一切使わないそば粉100%の「十割そば」である。

県道工事などが盛んに行われた昭和30年代には、工事関係者や県職員などに振る舞われ、口伝えでそのおいしさが広まったが、常設店がないため「幻のそば」と言われていた。

昭和50年代に入ると過疎化が深刻な問題となり、まち全体で誇れる「そば」で地域振興を図ろうという動きが高まり、昭和59年にそば大学、新そばまつりを開催することになった。

これを契機に商工会主導でそばの常設店の開店、そば栽培面積の拡大、そば資料館の建設など、「蕎麦の里づくり」に取り組んできたが、さらに活動の輪を広げ地域に根ざした振興を図るため、平成17年、そば店、農家、愛好者等をメンバーとした「会津山都そば協会」が設立された。

一流のそば処を目指し、技術の向上を図るため、自前のそば道場・蕎道館を建設し、後継者の育成に力を入れている。



第33回山都新そばまつりに出店した蕎道館

耶麻農高でそば打ち指導

耶麻農業高校、通称「やまこう」は、山都町の唯一の県立高校である。農業全般を学ぶ「産業技術科」では4ヘクタールの畑でソバを栽培し、1年生の時に全員が、「そば打ち」を会津山都そば協会の有段者から学ぶ。そこで「そば打ち」に興味を持った生徒は「グリーンメイキング部」*1に入部し、全麵協が実施する「全国高校生そば打ち選手権大会(通称そば打ち甲子園)」や「段位認定会」*2を目指す。これらに備え、放課後、約2時間、蕎道館で練習を続け、毎年3月に山都町で行われる大会で、初段、二段の認定者を輩出している。

高校生の出店チャレンジ

「そばの産地で高校生がそばを栽培しそば打ちを学ぶ。ここまではよく聞く話だ。今年やまこうは、そば打ちから一步先の「出店」にチャレンジした。開店は、山都町に1万5千人の人が訪れる『山都新そばまつり』。10月のまつりに焦点を合わせ、学校とタッグを組み進んできた。5月には「高校生レストラン」のプロデューサー、岸川 政之さんを招いて講演会を開き出店に向けた環境づくりを行った」と鈴木 勝 山都そば協会会長は振りかえる。



「山都新そばまつり」に出店したやまこうブース

講演をきっかけに、女子生徒が販売の勉強をし、店を手伝ってくれることになった。

「二段位」の腕前を持つ3年生の伊藤 健くんは、「これまで、大会に合わせ二八そば^{いとう けん}*3の練習をしてきた。出店するため、7月から十割そば打ちに切り替え練習を始めたが、なかなかまとまらなくて、生地づくりに苦労した。どうしたらあんなに上手にできるんだろう」と、指導してくれる人の様子を何度も、何度も観察しコツをつかんだという。

8月の下旬から地域の方々を招いた試食研究会を3回開催した。改良し、徐々に店の体裁も整い、生徒たちの気持ちも開店に向けて集中し、一つにまとまっていった。

地元の報道関係者を試食に招き初出店がリリースされていたこともあり、まつりの当日は開店前から列ができ、1日2回、各50食用意したそばはあっという間に完売。



1 2 白く透明感があり、コシ、歯ごたえがある山都そばを披露。わずか5分で完売。

3 継承者として期待される伊藤くん

「えっ！もうなくなったの」と耶麻農高のそばを楽しみに訪れた客が、がっかりして帰る姿が何度もみられた。そば打ちへの真摯な姿勢が実を結び、そばの出来映えは「出店しても十分やっつけていける」と鈴木会長からお墨付きをもらった。

2つの地域資源を繋げ活性化

地元就職が決まっている伊藤くん「山都のそばの信条は、『挽きたて』『打ちたて』『茹でたて』の三たてでお客様をもてなすこと。就職先にお客様が来られた時に、そばを打って出せば、必ず喜んでもらえる。一気に商談成立ということもあるかもしれない」と鈴木会長は笑いながら話す。「知らなかった。明日からおもてなしの気持ちを込めて打ってみよう」と応じる

伊藤くん。そば打ちをとおして、人とのつながり、関係を学んだ。これからもそば打ちを続け、習いたいという後輩がいたら教えたいという。

「幸い、歴代校長先生の理解と協力があり出店にこぎ着けた。ここまで来るのに10年かかった。山都の宝は、山都そばと耶麻農業高校。この2つの地域資源で、若い人が山都に住み、山都そばを受け継ぐ地域づくりを進め、新そばまつりに訪れる人に、そばの里の雰囲気を感じてもらいたい」と鈴木会長の話しに熱が入る。

「山都新そばまつり」に続き、文化祭、さらに東京にある情報発信拠点・日本橋ふくしま館で「チャレンジ出店」を展開した。

グリーンメイキング部の顧問を務める星 久一郎先生は「生徒たちはこの貴重な体験^{ほし きゅういちろう}をとおして成長している」と言い、安田 修久校長は「生徒数の減少が続き、活気を失っていたが、テレビや新聞でチャレンジ店が取り上げられようになり、生徒達は自分たちの活動に対する周囲の期待を感じ自信が生まれ、地域に誇りを持つようになった」と生徒の変化に目を見張る。

「住民の熱い思い受けとめ、行政でバックアップできる部分は応援していきたい」と山本喜多方市山都支所長と喜多方建設事務所に勤務する酒井さん。

協会、学校、行政の熱い期待を背に、耶麻農高生は、さらなるチャレンジを続けていくことだろう。



左から星先生、酒井さん、鈴木会長、山本支所長、安田校長

*1 そばの栽培など農作物の研究も行っている。

*2 段位は、「初段位」「二段位」「三段位」「四段位」「五段位」がある。

*3 小麦粉などのつなぎ2割、そば粉8割のそばを「二八そば」という。

問い合わせ先：会津山都そば協会

福島県喜多方市山都町字広葎田 2432-1

電話：0241-23-7300

特集「地域とともに」Ⅱ

地域づくりセミナーを開催しました

北陸地域づくり協会は、平成7年から、地域の自立と活性化を促進する目的で、地域に住む人々の多様な研究や活動を支援する「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業を行い、成果を発表いただく報告会を開催してきました。助成者の方々から、「助成後の研究活動の成果を発表する機会がほしい」、「事業へのアドバイスがほしい」、「助成者同士の情報交換・交流の場がほしい」などの要望をいただいていたことから、新しい試みとして、12月7日、長野市で「地域づくりセミナー」を開催しました。

前半は、研究助成事業を活用し、活動を発展させている2グループと現在助成中の共同研究の活動報告をしていただきました。

活動報告①（第18回助成）

助け合う心を伝える～地域の文化遺産を次世代に～
関 由有子さん
(NPO法人高田誓女の文化を保存・発信する会 副理事長)

活動報告②（第17回助成）

白山しらみね薪の会の取り組み
～森と山里を元気に～
風 一さん (白山しらみね薪の会 事務局長)

活動報告③（第20回～助成中）

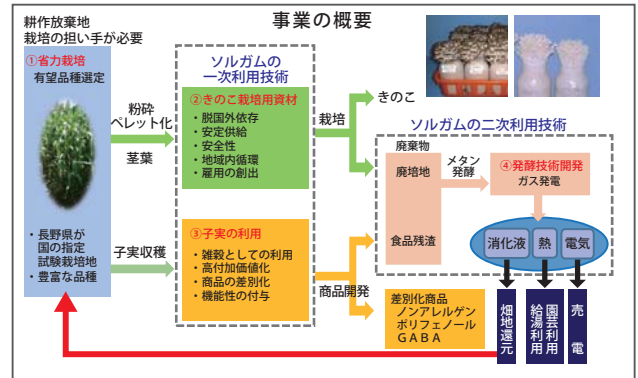
ソルガムが拓く地域自立型循環モデルの開発
天野 良彦さん (信州大学 学術研究院工学系 教授)

後半は、七尾市でまちづくり会社、(株)御祓川の代表取締役を務め、現在、研究助成事業の審査委員をお願いしている森山奈美さんの進行で、意見交換会が行われました。

長野市と信州大学は、耕作放棄地の有効利用を目指して、平成25年度から「ソルガムきび」を栽培し、食糧とエネルギーの生産による地域活性化を検討し、一連の循環型農業のモデルを構築しています。平成28年度は、経済性を伴った地域産業に成長させるため、「ソルガムきび活用推進協議会」の設立等、組織づくりを進めていますが、組織化について、少し議論が停滞している現状でした。

そこで、この課題を解決するため「フィッシュボール」(金魚鉢会議)方式で話し合いました。

まず参加者全員が付箋に「本日は話し合いたいテーマ」に対する自分の考えを付箋に書いて隣の人と話し合いました。



▶本日、話し合いたいテーマ

- ・助成金が切れた後の活動をどうするか
- ・どうすれば、助成金・補助金を渡り歩かず活動を続けられるか
- ・どうやったら活動の主体性が高まるか

次に中央でプロジェクトの各組織の代表4人と森山さんが対話しながら、現在の課題を整理し、解決策を導き、今後の取り組みへのアドバイスをいただく形で進められました。

他の参加者(関さん、風さん、長野市、信州大学の関係者、協会担当者)は聴講する形ですが、意見があれば、中央の空いている席へ来て発言できるようになっています。



「フィッシュボール」(金魚鉢会議)方式で行われた意見交換会

鎌倉氏 天野氏
森山氏
新井氏 新保氏

信州大学 天野 良彦先生	長野市・信州大学の共同研究 ソルガムプロジェクトの代表
長野市 新井 雄太郎さん	七二会支所、産業政策課、農業政策課、農業委員会事務局、環境政策課の横断事業の担当
信州ソルガム(株) 鎌倉 彬さん	ソルガム生産者。ソルガムビール販売の株式会社を28年8月に設立
コンサルタント 新保 正さん	28年度から組織・事業モデルづくりのサジェスションを実施。

現在の課題 (鎌倉さん)

役所は、担当者が変わると、それまで築いてきたものが引き継がれず、先に進まなくなり消滅してしまうという組織の弱点がある。

最初は気が進まなかったが、長野市の新井さんの熱意に感銘し、また生産したソルガムや商品を流通ルートに乗せ、その素晴らしさを多くの人に知ってもらうには組織が必要だと思い参加している。

役所や大学と事業を進めるスピードが違い、自己資金もあるので機械を購入し、採算を度外視して生産量を増やし、小麦粉との価格差を縮めたいと奮闘している。

71歳なので、後継者についても考える。ソルガムを生産したいという若者も出てきたが、帳尻合わせばかり考え夢がない。

(新井さん)

長野市、信州大学ともに利益の追求ができない組織なので、民間業者、地域へ利益を還元するアシストとしてプレーヤーを探さなければならない。

行政は事業の予算化に1年かかり、スピード感に違いが生まれる。

長野市の学校給食に試験的に出してもらったが、異物混入等の基準が厳しく課題がある。

(天野先生)

ソルガムに関する問合せもあり、使いたいと思っている人がいる。食品ポテンシャルもある。プレーヤーとなる生産者もいる。

スピードは遅いが、良いところまできている。生産したソルガムをいかに流通ルートに乗せていくかの「つなぎ」の部分が課題だ。



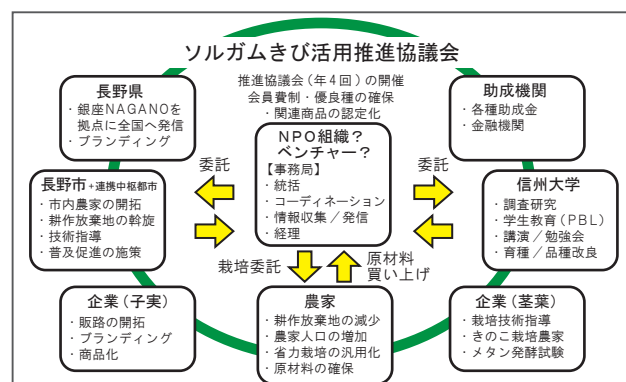
「ソルガムを使ったビールをつくってみたかった」という鎌倉さんの夢を実現した「ソルガムエール」。ラベルのデザインは信州大学の新雄太先生。

課題解決にむけて

森山さんから「売れる品質管理、流通、後継者づくりが課題としてみえてきた。ではどうす

ればいいのか」との問いがあり、ここで、関由有子さんから後継者問題について「女性をいれられないか」との提案がありました。

信州大学の田村守康先生が、「男達は組織をつくろう、つくろう、大変だ」といっているが、生産者グループの「七二会かあさんち」、健康食品コンペに応募する女性たちなど、女性が楽しみながら事業に参加していることが紹介されました。



審査委員の他に一般来場者も審査・投票できる「ソルガムきび健康食品コンペティション」

鎌倉さんから、価格、利益をどうやって分配していくのかなど、生産者をつなぐ「事務局」機能が必要だという要望がありました。

天野先生は、「つなぐ場」、「流通のコーディネート」の必要性を感じているが、その組織が利益を求めているのかどうかで議論が行き詰まっている状況を説明されました。森山さんから、「事務局機能は必要だが、だれがやるか」というところになるとピタリと止まる。『中間支援組織のビジネスモデル』をどうつくるかが多くの活動で課題になっているというお話がありました。

これまでの議論を受けて

1. 「事業モデル」を描く

目指す事業規模をはっきりさせる。いくらで市場に出すのが妥当か。どれくらいの利益が出れば、事務局組織が設けられるか、新保さんがきちんと計算をしてみる。

2. 後継者の育成へ

女性のコミュニティの参画。さらにプロジェクトは若い人がチャレンジできる場になりそうなので、大学の教育プログラムに組み込めば後継者をみつける場になるかもしれない。

3. 「場」をつくる

市役所で事務局を持ち、声をかければ集まるようなネットワーク組織をつくる。またそれを予算化しておく。

がまとめられ、中央の意見交換が終了しました。

学びの共有

引き続き参加者全員が、白紙に今日、気づいたことをキーワードで記載。一斉に見せて「学びを共有」しました。

天野先生から一番気になるキーワード「適材適所、適正な規模」を選んでいただき、記入した関さんが「情熱を持った人と適正な規模で事業をコーディネートすることが必要だ」とその意味を説明しました。

次に新保さんが、森山さんが書かれた「中間支援的機能を継続・維持するビジネスモデル」を選び、森山さんは、議論をしながら、改めて中間支援的な機能の必要性とあり方の難しさを痛感されたそうです。

最後に森山さんが、「結び」を選び、協会の大堀さんが「組織にこだわっていたが、つなぐ役割を持つところがあればもう動く。それは商社という選択もあるのでは」と説明がありました。

新井さんから「市は大学がつくるモデル事業をこれからもいっしょに練り上げていく」、鎌倉さんからは「少し進んだかなという気がする」との発言がありました。

「事業が進んでいくと、また次の課題が出て来る。その時に頼りになるのがネットワーク。今日は勇気の出るプロジェクトを議論できた」と森山さんが結び終了しました。



「ソルガムきび」プロジェクトのメンバー

意見交換会を聴講し、「組織というよりは、自由に出入りでき、私はこんなことをやっただ、お互いに自慢できる環境になっていけばいいのでは」という森山さんのアドバイス、「みんなの気持ちが一つになった時に一気に進めない」と言う鎌倉さんの言葉が心に残りました。

「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業 募集中

【募集期間】平成28年12月1日(木)～平成29年2月1日(水)

詳細は、協会ホームページ (<http://www2.hokurikutei.or.jp/>) の
トップページ「お知らせ」2016年12月1日をご覧ください。
皆様のご応募をお待ちしています。

助成事業名	助成対象	助成金	助成 予定数	審査
地域づくり研究事業	大学・企業・法人 任意団体・個人 またはこれらの団体	20～50万円 完成払 (概算払1/2まで)	12	書類審査
技術開発支援事業			3	書類審査
技術開発共同研究	大学もしくは高専を含む 2つ以上の機関	200～300万円 (概算払1/2まで)	2	書類審査 プレゼンテーション

※助成数は増減することがあります。

※助成金は完成時の実績に基づいてお支払します。結果、申請額より少なくなる場合もあります。

会員だより

「平成 28 年秋の叙勲」で、栄えある勲章を 3 名の会員の方が受章されました。長年のご功績が顕彰されたものであり、心からお祝い申し上げます。

瑞宝双光章

高橋 清昭 氏

(新潟県新潟市在住)

元北陸地方建設局
用地部 用地調整官



農業が建設省への就職

平成 28 年秋の叙勲をいただき皆さまに感謝申し上げます。

この受賞は諸先輩の良きご指導と、同輩、後輩のご支援の賜ものと肝に銘じています。

私は、昭和 19 年佐渡の農家の長男として生まれ、佐渡では比較的大規模な専業農家であったことから当然、農業高校を卒業したのち農業を継ぐものだと思いながら、小中学校の頃から農家の手伝いをしていました。

高校受験を控え父から、遠くの農業高校まで通わなくとも、地元の通学可能な両津高校へ行けと言われ卒業後に農業の知識のないままではと不安を感じながらも高校では野球部で楽しく過ごし、卒業を控えた 3 年の夏頃に親から家の農業は両親で守るから、暫くは佐渡を離れ本土に渡って職場を探しても良いとの話があり、目指した国家公務員に合格し、何故か佐渡には建設省がないのに面接を受け採用通知をいただきました。

昭和 38 年新潟国道事務所の用地課に配属され公務員生活がスタートし、今では用地測量や物件調査の大半は外注ですが、当時は用地測量も建物調査も直営で行い、長さや面積は尺貫法からメートル法へ切替わった時期でした。

調査は用地職員自ら行い、関係者と直接に接する際は、関係者から信頼を得られるよう心掛け、用地交渉は土地を買うのではなく人の心を買う仕事であると常に先輩から指導をいただき、相手の立場も意識して行動するようになりました。

昭和 48 年からの阿賀川事務所での、大川ダムの一般補償に於いては 3 集落 70 戸の移転と、それに伴う生活再建対策、あるいは国鉄会津線付替え、漁業補償、温泉補償、発電所補償等、北陸地建としては本格的な補償フルコースのダムであり貴重な 5 年 3 ヶ月で、会津で生まれた子供達もそれぞれ独立し今は妻と二人で、いずれは佐渡に定住の予定です。

私は入所して 39 年間で、事務の副所長 3 年以外は全て用地担当一筋でした。

この間、本局 4 回の勤務をはじめ新潟県の 6 事務所、金沢工事事務所に勤務し、特に年度末近くになると予算消化に追われ苦しい時もありましたが、工事が完成した箇所を車で通るたびに、用地買収にご協力を頂いた関係者に感謝しながら、当時を思い出し、一生の仕事と思い、退職後も引き続き楽しみながら用地業務に携わっています。

佐渡で農業に携わるのが宿命と思っていた職業が、社会資本の整備には必ず必要な用地買収に 50 年余りも携われたのは、今は亡き両親が元気で、家を守ってくれたことと、あらためて建設省時代を過ごした皆さまには深く感謝申し上げます。

瑞宝小綬章

松村 哲男 氏

(東京都世田谷区在住)

元北陸地方建設局
企画部長

瑞宝双光章

山本 建氏

(兵庫県川西市在住)

元北陸地方建設局
富山工事事務所長



伝言板

(一社)北陸地域づくり協会が主催、共催、後援等で行う一般参加型事業です。
お時間をみつけ、ぜひお立寄りください。

イベント名	期 日	開催地・会場	内 容	問合せ先
平成 28 年度 「防災とボランティア 週間」防災講演会	1月19日(木) 15:00～17:15	いきいきKAN 多目的ホール (富山市新富町) 定員 150 名	講演① 「防災における最近の課題と取り組み」 講師:福濱 方哉 氏 国土交通省北陸地方整備局 富山河川国道事務所長 講演② 「熊本地震に学ぶ北陸の地震防災」 講師:宮島 昌克 氏 金沢大学 理工研究域 環境デザイン学系 教授	北陸地域づくり協会 企画部 TEL:025-381-1160 FAX:025-383-1205 締切:1月10日(火)
第 15 回 社会資本整備 セミナー	1月16日(月) 13:30～16:00	新潟県自治会館 1F「講堂」 定員 300 名	講演① 「最近の国土交通行政の 取り組みについて」 講師:北陸地方整備局 担当官 講演② 「歴史に学ぶ社会資本整備」 【副題】 新潟「土木技術者の本懐とは何か ～広井勇の薫陶～」 長野「“真田丸”に見る土木の風景」 金沢「金沢の風土が育んだ 土木技術者たち」 富山「立山砂防と私たちの暮らし」 講師:緒方 英樹 氏 (一財)全国建設研修センター 事業推進室特任専門役	社会資本整備セミナー 事務局(北陸地域づく り協会 技術部) TEL:025-381-1882 FAX:025-383-1470 締切:1月10日(火)
	1月18日(水) 13:00～15:30	長野バスターミナル 会館4F「国際ホール」 定員 100 名		
	1月26日(木) 13:30～16:00	石川県地場産業振興 センター 2F「第1研修室」 定員 150 名		
	1月27日(金) 9:30～12:00	ポルファートとやま 4F「琥珀」 定員 150 名		
河川情報センター 講演会	1月25日(水) 14:00～16:15	新潟県自治会館 講堂	講演① 「越後平野における治水の課題と その解決の方向性」 講師:安田 浩保 氏 新潟大学 災害・復興科学研究所 准教授 講演② 「水防災意識社会再構築に向けた 実践的取り組み」 講師:石川 俊之 氏 国土交通省北陸地方整備局 阿賀野川河川事務所長	河川情報センター 新潟センター TEL:025-281-7511 FAX:025-281-7522 締切:1月10日(火)
地域の明日を考える 講演会	2月15日(水) 14:00～15:40	ANAクラウン プラザホテル 2F「芙蓉」 (新潟市中央区万代) 定員 150 名	「『道の駅』と地方創生 —新たな拠点への進化—」 講師:石田 東生 氏 筑波大学 システム情報系 社会学域 教授	北陸地域づくり協会 企画部 TEL:025-381-1160 FAX:025-383-1205 締切:2月10日(金)
第 13 回 南砺利賀そば祭り	2月10日(金) ～2月12日(日)	利賀国際キャンプ場 周辺(南砺市利賀村 上百瀬)	利賀特産そば粉を使用した手打ち そばや岩魚の塩焼き、五平餅などを 味わい、民謡、雪夜の花火ショーな どが楽しめる	南砺利賀そば祭り実行 委員会(南砺市利賀 行政センター内) TEL:0763-68-2111
「北陸地域の活性 化」に関する研究 助成事業報告会	3月14日(火) 13:00～17:30	アートホテル 新潟駅前 4F「越後西」 定員 100 名	第 21 回「北陸地域の活性化」に 関する研究助成事業、18 課題の 成果報告	北陸地域づくり協会 企画部 TEL:025-381-1160 FAX:025-383-1205

編集後記

謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

1998年にNPO法が成立してから19年。多くの市民団体が生まれ活動を進めてきましたが、会員の高齢化等で事業の継続が課題になっています。今号で紹介した事業もしかしりですが、知恵をしぼり、何とか地域を良くしていきたいと前向きな姿に感動しました。今年も、研究助成事業等をとおして地域づくりを応援していきたいと思ひます。

(事務局)

地域づくり in ほくりく 第12号

発行 平成29年1月1日

編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会

〒950-0197

新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号

電話 (025) 381-1160

FAX (025) 383-1205

HP: <http://www2.hokurikutei.or.jp>